

までも病院図書室に依頼のあった文献のみです。

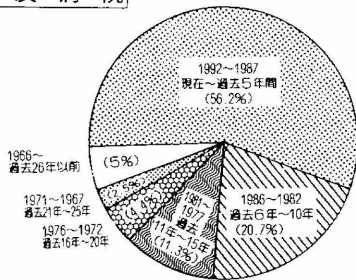
下が私どもの京都南病院で、上に大阪の住友病院のものを拝借しました。2つの病院で、1年間の総件数、傾向は似ているというよりもほとんど同じ結果が出ています。5年前までの文献が約半分。5年から10年前の文献が半分の半分。その残りの半分以上が10年から15年前まで。またその残りの半分以上が15年から20年というふうにして、5年ごとに区切ってみると、このような結果が出てきます(図1)。

<図1>

利用文献発行年の比較 (2病院)

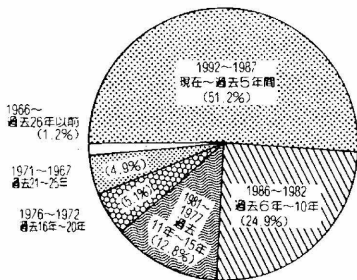
—— 最近一年間の相互貸借件数より ——

住友病院



● 総件数 910件

京都南病院



● 総件数 946件

以上のようなことを頭の隅に置いていただいで、シンポジウムに入っていきたいと思ひます。

資料保存上の諸問題

千住 とも子

(日生病院)

1. はじめに

病院図書室はその規模、歴史によって所蔵する資料の質量が違います。しかし、資料の収容能力に遅かれ早かれ限界が来るという事は共通に言えるのではないのでしょうか。

そこで今回はすでに経験したかいずれ経験するか、どの図書室でも必ず経験する保存スペースの限界ということに視点をおいて「病院図書室における資料の保存」について考えてみたいと思ひます。

2. 保存のための廃棄

私が勤務します日生病院は1924年の創立で、当時の雑誌やハンドブック、単行書を1990年10月まで保存していました。図書室が満杯で、それらは別館にある会議室と畳2帖ほどの小さなプレハブ小屋2棟に別置されていました。2年前ある日突然、会議室を明け渡すようにとの指示がありました。

その明け渡しまでの期間は明け渡し作業を含めて約2カ月。考慮に要する時間的余裕は僅かしかありませんでした。図書委員会で討議の結果、他に収納スペースが得られなければ医学中央雑誌(1928年から所蔵)は残す、それ以外は希望者があれば寄贈し、残ったものは廃棄せざるを得ないという結論に至りました。

幾分か希望者の手に移りましたがほとんどは清掃業者への廃棄となりました。資料の売却は引き取り業者がなく行われませんでした。

現在、残された医学中央雑誌はプレハブ小屋に収納されています。ここには照明の設備がありません。本を探す時には懐中電灯を必要とします。また、直射日光こそあたりませんが空調等の設備がなく温度や湿度が自然環境そのままにあります。この環境で経過しますと本が傷みます。せつかく残した医学中央雑誌ですから図書室の書架構成を再度検討して図書室の方へ移し替えようと考えて

います。

### 3. 病院図書室における資料廃棄の経験

今回この全国図書室研究会参加者に対して「スペース確保のために資料を廃棄したことがありますか」という調査が行われました。調査用紙は70枚回収されました。その内「スペース確保のために資料を廃棄したことがある」は46件(66%)、「ない」は24件(34%)、「ない」の中に「廃棄しつつある」「現在検討中」と1件ずつただし書きがついていました。このように全般的にはすでに資料の廃棄を経験した図書室の方が多いのですが、1991年6月に近畿病院図書室協議会(以下、近病図協)会員に対して行われた製本雑誌の保存期間、廃棄等についての調査によると「製本雑誌を廃棄したことがありますか」という問いに対し、27%が「あり」、71%が「なし」ということでした。さらに「製本雑誌の廃棄については」という問いに対しては「廃棄もやむをえない」76%、「廃棄はすべきではない」18%となっていました。実際に廃棄には至っていないがいずれやむを得ないということのようです。

### 4. 雑誌の保存

#### (1)保存期間

当院の場合資料を60年持ちこたえることができたのは、古くは、雑誌にしても単行書にしても発行される種類が少なく、図書室に受け入れる量が今ほど多くはなかったのでスペース的に長年月蓄積することができたのだと考えられます。ところが図書室が過飽和に陥り突発的に資料の廃棄を体験した現在、今後スペースが拡がる目途は立たないので、効果的な書架運営のためには資料の廃棄方針をたてなければならぬことを痛感しています。

1991年6月の近病図協の調査によると保存期間について18%の図書室が「保存期間あり」で、80%の図書室が「保存期間なし」となっており、近病図協でもまだほとんど保存期間が決まっていない状況です。

1989年4月の「ほすびたるらいぶらりあん、14巻(特別号)」に掲載されている「米国における

病院図書室基準」には、病院の大きさ別に資料の保存期間が打ち出されています(表1)。米国と日本では病院図書室を取りまく環境が違います。また、この数字が生み出された基が分かりませんのでこの数字をどのように判断すればいいのかとまどいますが、病院図書室に関して数量化があるということの参考になります。

表1 米国における病院図書室の量的基準

病院の規模分類	単行書		雑誌	
	年間購入数	全蔵書数	カレント	バックナンバー
A	550冊以上	10,000冊以上	600種以上	20年以上
B	350冊以上	3,500冊以上	400種以上	15年以上
C	210冊以上	2,000冊以上	200種以上	10年以上
D	100冊以上	1,000冊以上	100種以上	5年以上
E	50冊以上	750冊以上	40種以上	5年以上
F	20冊以上	150冊以上	25種以上	5年以上

(米国における病院図書室基準より抜粋)

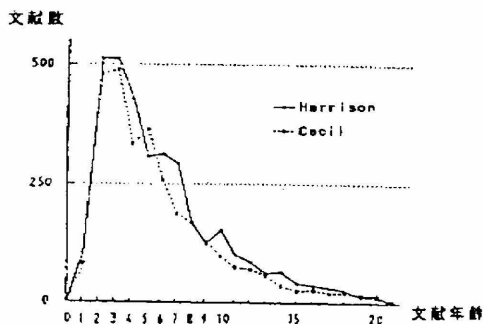


図1 引用雑誌文献の衰退分布

植手氏の北野病院図書室における雑誌発行年度別利用度調査<sup>1)</sup>によると洋雑誌は過去20年間、和雑誌は過去15年から20年の間は利用度が高いこと、しかし、学会雑誌など原著論文が主体の雑誌は20年以上を遡る利用があることが報告されています。また、増田氏のハリソン内科書第11版(1987年)、セシル内科書第18版(1988年)に引用された雑誌の発行年調査<sup>2)</sup>によると発行年から2、3年前に遡り発行された雑誌の引用数がピーク(図1)で、教科書でも最新の文献の利用度が高いことが報告されています。

図書室の面積、書架の数、受け入れタイトル数から量的な保存可能期間の概算はできます。それ

に利用状況を加味して、保存期間をどのくらいに設定するか、今後の課題です。

## (2)製本

雑誌の保存は、雑誌の散逸を防ぎ破損を予防するために基本的には製本をします。しかし「一誌を5年以上保存しない図書館では製本は不経済と言える」とする見解<sup>3)</sup>があります。

雑誌の製本にはその準備、納品されてからの検収、登録等かなりの仕事量を必要とします。そして製本期間中は利用できません。それに製本は専門の業者に依頼しますので費用もかかります。将来廃棄が予定される場合、費やした労働力や費用が無駄にならないようもちろん利用状況を勘案して、製本、未製本の峻別が必要とされます。

## 5. 単行書の保存

病院図書室の「本」は文化財としての「本」ではなく、医療器機の一つと考えられるのではないのでしょうか。医療現場で医療器機が駆使されるのと同じように、診断のための情報や数値を求めて、また治療のための方針を決めるために、薬の効果をj知るために「本」のページが繰られ利用されます。誰でもが共通に利用する「本」もあれば、利用者の世代により使い慣れた「本」、繰り慣れたページというものがあります。また「本」が改訂されても旧版が必要とされる場合もあります<sup>4)</sup>。疾病構造が変わっても過去の疾病に学ぶ必要があるかもしれません。とにかく単行書の保存においては、発行年の古さを保存・廃棄の基準にすることはできません。要る要らないはその専門領域の利用者の判断によります。ただ、利用度の落ちた単行書と新しい単行書が同一書架に混在していると利用の効率が悪くなります。別置する、廃棄するなどして書架を新鮮に保つ必要があります。

## 6. 資料保存不要の情報入手

オンラインを利用して情報を手に入れることはもう常識です。ただオンラインは時間との闘いで費用が嵩んでいきます。この費用の面を解決するために最近新しい情報媒体としてCD-ROM(ここでは文献検索用CD-ROMに限ります)と呼ばれる

ものが市場に出てきました。ところがこの文献検索用のCDは買い取ることはできません。これはCD利用のためのライセンス契約を結び使用するもので、契約を解除すれば業者に返還しなければならないものです。図書室に資料として蓄積するものではありません。

図書室の資料が様変わりを始めました。

## 7. ネットワークにおける資料の保存

最後に、スペースに余裕があっても保存する資料そのものに限界があることの問題です。

どんなに規模の大きい図書館でも自館資料では利用者の要求には応えられません。他機関から資料を借りたり他機関に資料の複写依頼をするはず

です。しかし、目録で資料の所蔵を確認して依頼をしても依頼の相手方がすでに資料の廃棄を行っていたとしたら、次の依頼先を探さなければなりません。次が廃棄していないという保証もありません。つまり、資料の保存、廃棄の問題は個々の病院図書室だけの問題ではなく、相互貸借にかかわるネットワーク間の資料保存の問題でもあるというわけです。

## 8. おわりに

資料を保存してこそ図書室の値打ちですから現実的に物理的にスペースがないということを大義名分に資料の廃棄が安易に行われてはなりません。しかし、実際資料保存のためのスペースは限られています。資料の効率的な運用のためには資料の移し替えや廃棄はやむを得ないことです。内容、利用頻度、将来の利用見込み、あるいは廃棄した場合に外部からの入手が可能であるかどうかなどを総合して、資料の種類やタイプごとに保存の方針(保存期間、移し替えなど)を決めて、日常的に書架のメンテナンスを行うことが大切だと考えます。

## 《参考文献》

- 1) 植手鉄男：利用統計からみた図書室の評価と新たな企画；北野病院1980年度資料の分析か

- 2) 増田晃一：引用分析からみた内科学書の特性、医学図書館 1990、37:272-277
- 3) Wakeley,PC,May,RS：ヘルスサイエンス図書館員の基礎知識、(津田良成)、東京、日外アソシエーツ、1986、33
- 4) 山室真知子：シンポジウム、利用者サービスの向上のために；討論、病院図書室 1990、11:61-62

## 資料の分担保存

加島 民子

(大阪回生病院)

### 1. はじめに

私に与えられたテーマは「資料の分担保存」であるが、話を具体的にするために、現在準備を進めている近畿病院図書室協議会の雑誌の分担保存計画を叩き台にして述べてみる。参考資料として、近畿病院図書室協議会の医学雑誌総合目録のデータと年次統計資料を利用して、分担保存の可能性を探り、次に分担保存の作業準備状況を紹介する。

まず分担保存は必要なのか、また可能なのか、あるいはナンセンスなのかという基本的な問題について考えてみる。

### 2. 分担保存は必要か(表1)

近畿病院図書室協議会(以下病図協と略す)の1990年度の統計によると、図書室の面積は平均145㎡と狭く、年々平均375冊ずつ増えていく製本雑誌の保管にはほとんどの病院が頭を痛めている。古い雑誌を離れた所の倉庫にダンボールを積み上げて保存しては利用も難しく、相互貸借に応じられないところも増えている。小さな図書室とはいえなかなか蔵書というものは捨てがたいものである。それでも昨今は廃棄している図書室が増えている。1989年の病図協の調査(回答数49会員、71%)では39%の病院が廃棄を行っている。さらに、昨日この会場で行ったアンケートによると廃棄をしたことがあると答えた参加者が3分の2という結果であった。

分担保存の発想は資料を捨てざるを得ない状況

から生まれた。総合目録に載っている雑誌がいつの間にか消えているのが相互貸借の謝絶で判明することがある。各会員が分担して古い雑誌を責任を持って保存することにより、病図協全体の雑誌1876誌が保障され、単純計算で会員の平均受け入れ雑誌177誌の約10倍を共有できることになる。

また、古い雑誌の利用度を相互貸借文献の発行年で調べると、過去10年以内の新しい文献がほぼ70%を占め、過去20年以内では90%をカバーしている。当図書室では、病図協で分担保存計画が決定された時期に廃棄の問題が起り、10年保管と決まった。10年以前の廃棄する雑誌の利用が30%であれば、それを分担保存で賄って、古い雑誌を廃棄してもいいかと思切ることができた。分担保存は図書室スペースの有効利用にも繋がるのではないだろうか。

表1 廃棄せざるを得ない病院図書室事情

図書室面積	平均 145㎡ (最大868㎡ 最小24.7㎡)
受入・製本雑誌	平均 177誌 製本雑誌 平均 375冊/年
発行年からみた文献利用度	相互貸借文献の発行年 過去10年以内の文献70%、20年以内で90%

### 3. 分担保存は可能か(表2)

分担保存は必要であるとして、次に実際に分担保存が77会員の病図協で可能かどうかを考えなければならない。病図協ではこれまでに何度か分担保存についてアンケートをとって検討してきたが、実現には至っていない。分担保存の効果と会員の負担とのバランスがとれなくては実施は難しい。分担保存の準備を進めていくと、まず会員間の格差に啞然とする。表2のように図書室職員数は1名から3名、この3倍の差だけでも影響は大きい。所蔵雑誌数の格差はさらに大きく、和雑誌を最も多く持っている病院251誌に対して、最少は1誌(洋雑誌のみ公費で購入する方針の病院)という結果であった。統計調査で単純に平均を出しただけでは、病図協ではあまり意味を成さない。設立当時から現在までずっと会員間の格差を承知で活動をしている。

相互貸借サービスの件数の格差も大きいのが、今までに負担が大きいという苦情は聞いていない。